

Digital Cultural Heritage を用いた

大正期のグラフ雑誌「歴史写真」の分析とその課題

研谷 紀夫
関西大学 総合情報学部

写真を中心に構成された「グラフ雑誌」は大正時代に様々な機関より発行され、一般に広がるようになった。しかし大正初期に公刊されたグラフ雑誌を発行した主体や発行の経緯などについては明らかにされていない点が多い。そのため本研究では、黎明期のグラフ雑誌である「歴史写真」に掲載された写真の内容と編集運営などに関する調査をおこなう目的で、雑誌のデジタル化を行い、各号全体と各頁の両方にメタデータを付与することができる階層型の Digital Cultural Heritage システムに格納した。その上で、調査で得た情報を、メタデータや電子付箋などに付与し、事後に検証ができるようにした。本研究では、一種の Digital Cultural Heritage システムを用いて戦前期のグラフ雑誌の調査研究を行う有効性と課題について解説する。

An Analysis of the Taishō Era Graphic Magazine *Rekishī Shashin* Using the Digital Cultural Heritage and Related Issues

Norio Togiya
Faculty of Informatics, Kansai University

Graphic magazines focusing on photographs were issued in the Taishō era by various organizations, and were popularly received. However, many uncertain points remain regarding the organizations issuing the graphic magazines published in the Taishō era, along with the circumstances leading to their issuing. For that reason, with the goal of pursuing studies concerning the photographic content, editing, management, and so on of *Rekishī Shashin*, a magazine at the dawning of the graphic magazine era, in this study we digitized the magazines and stored the data in the hierarchical Digital Cultural Heritage system enabling the attachment of metadata both for each issue and each page. Further, the data obtained in the study was made available for later studies through metadata, by attaching electronic tags, and so on. In this study we comment on the advantages and issues related to studies of pre-WWII graphic magazines using one kind of Digital Cultural Heritage system.

1. はじめに

雑誌「歴史写真」は、実業家秋吉善太郎（1866-1924）によって、今から百年前の大正 2（1913）年に創刊され、戦中まで発行されていた定期刊行物である。同誌は 20～30 ページ程度の誌面で構成され、1 ページに 1 枚の割合で、およそ 2 週間～2 ヶ月前におきた出来事の写真を掲載している。写真の被写体は多岐に渡り、国内外の事件や災害、戦争に至るまで様々な話題を対象としていた。

本雑誌が発行された大正の初期は、写真帖が多数発行された明治時代と、「アサヒグラフ」や「写真週報」などのグラフ雑誌が発行される大正後期以降の中間の時期にあたり、同誌は両者の橋渡しをする役割を担う位置づけにある。そのため、本誌の概要を明らかにすることは、明治期の写真産業と大正期のマスメディアとのつながりを明らかにすることにもつながり、重要な研究対象である。

「歴史写真」が発行されていた初期には明治期の写真師である、小川一眞(1860-1929)と丸木利陽(1854-1923)が顧問となっており、これまでの写真帖や画報雑誌などの型式を一部継承している面がある。しかし、写真掲載が口絵など一部に留まっていた「画報雑誌」や、手工業的な生産物の多かった「写真帖」と異なり、大部分が写真によって構成されながら、最新の印刷技術を用いることによって、短時間に大量に生産し発行する点がこれまでのメディアと異なる。

このような特徴のある「歴史写真」であるが、明治期における画報雑誌における研究や、大正 12（1923）年以降の「アサヒグラフ」や戦時期のプロパガンダ目的で発行されてグラフ雑誌と比較して、その内容は詳らかになっていない。本研究では、このグラフ雑誌「歴史写真」の概要を様々な文化資源をデジタル化して公開する一種の Digital Cultural Heritage システムを用いて調査を行った。本論で述べる Digital Cultural

Heritage システムとは、一般に「デジタルアーカイブ」と呼ばれる文化資源をデジタル化して公開するシステムと概ね同じ意味を持つ。本論文では、今後の研究の進展が期待される大正期以降のグラフ雑誌の調査において Digital Cultural Heritage システムを活用する有効性について検証する。(以下 Digital Cultural Heritage システムは「DCH システム」と総称する。)

2. 調査過程

2-1. 研究対象の特徴と研究調査方法

筆者は幕末から大正期までの写真師による写真の生産とそのメディア表象などについての研究に従事してきたが[1]、その一環として、明治期の写真師である丸木利陽や小川一眞が顧問を務めた雑誌「歴史写真」の研究調査を行った。丸木と小川は明治中期から大正時代に至る長い期間に渡って、天皇や皇族・華族、などの社会的地位の高い人物の肖像写真の他、戦争や国葬などの国家的なイベントに関する写真撮影を行っている。そして撮影を行った写真は各種の「画報雑誌」に掲載された他、自ら写真帖などを発行することを通して、市井に様々なイメージを提供する役割を担っていた。

しかし、これらの役割は大正時代から、より規模の大きい撮影・編集体制を擁する報道機関や出版社、政府の宣伝広報部門などに移行していった。本研究でとりあげる雑誌「歴史写真」は、そのような過渡期的な時期に発行が開始されたメディアであった。

調査にあたっては、筆者が既に調査用に入手していた「歴史写真」の中で、創刊期の大正 2(1913)年 4 月から大正 5 (1916) 年 3 月までの三年間を考察の対象とした。三年間を考察の対象としたのは、同雑誌は徐々にその形態や内容を変化させたが、創刊三年目より表紙に絵や写真が入るなど大きな変更が加えられていることや、三年間で総ページが累計 890 頁に及ぶため、詳細な検討を行い、論考としてまとめるためには、創刊から三年間に焦点をあてるのが適切と考え、この期間に焦点をあてることとした。

また、調査にあたっては、同誌が創刊から既に百年以上が経過し、状態も良好とはいえない上、総頁数も 890 頁に及ぶため原資料だけで調査を進めることは極めて難しい。また、現物資料を確認して研究ノートに記録するだけに留まると、掲載された写真の種類別の割合を算出するなど計量的な処理を効率的かつ正確に行うには各種の困難が伴う。そのため、これらを DCH システムに格納し、検索などを通じてより客観的に分析を

行うこととした。

この「歴史写真」に関する研究の中で、同誌をメディア史の観点からみた総合的な考察は別稿に譲り、「歴史写真」のような大正期のグラフ雑誌をより客観的かつ計量的に分析する場合の DCH システムの有効性と課題を明らかにする。

2-2. 調査概要とその方法

明治期の画報を中心とした雑誌メディアに関する研究と、関東大震災以降のグラフ雑誌に関する研究についてはこれまで様々な成果が出されている[2]。それらの研究において、主なテーマとなっているのは(1)発行主と発行組織の概要、(2)編集体制と編集過程、(3)掲載された内容、(4)写真やレイアウトに関する表現、(5)流通体制および読者層、(6)印刷技術、などに関する調査内容である。明治期の画報については(1)から(3)についての研究が重点的に行われ、関東大震災以降のグラフ雑誌については、(4)及び(5)などに着目した研究が行われている。

本研究で対象とする「歴史写真」については、これまで基本的な調査がなされていないため、これらの全てについて未解明な点が多い。よって、誌面及びその他の資料から(1)から(6)の各内容についての調査を行った。

2-3. デジタル化の過程と目的

前項で示したような調査を行うに際して、890 頁に及ぶ原本のみを対象とする調査は、前述したように様々な点で困難があり制約がある。そのため、これらの概要をデジタル化し、メタデータと電子付箋などを付与することで、掲載写真の被写体の種類ごとの比率、撮影地、撮影から掲載までの日数、編集過程の情報、ページレイアウトの概要を調査することとした。

資料をデジタル化し、DCH システムに格納する場合は、メタデータを取得する単位をどこに定めるかという点が課題となる。既に「歴史写真」の一部については、国立国会図書館においてデジタル化が行われ、館内限定で公開が行われている。しかし、同館のシステムでは一号ごとにメタデータが付与されているため、個々の写真ごとにメタデータを付与することができない。活字刊本などであれば目次機能などが付与されている場合もあるが、章タイトルなど最低限の情報に留まり詳細な情報を記載することができない。

雑誌媒体ではないが、後藤真(2012)は写真アルバムのメタデータ表記を、階層構造を用いて行う実践をしている[3]。同様に「歴史写真」のようなグラフ雑誌についても、雑誌単位のメタデータ記述とともに、各頁の写真単位のメタデータ記述が必要である。そのため、本研究においても、ア

ーカイズなどに用いられる階層型のDCHシステムをデジタルデータの格納とメタデータの記述に活用することにした。階層構造を用いることで、雑誌全体と各頁の、両方にメタデータを付与することが可能となるため、各号、各頁単位で検索を行うことができる。階層型のDCHシステムとしては、筆者が開発に参加した「東京大学大学院情報学環・社会情報研究資料センターデジタルカルチュラルヘリテージ」用に開発されたシステムを用いることとした[4]。そしてこのシステムを特に改変せず、そのまま利用して「歴史写真」に関するデータを格納した。

同システムは資料を階層構造で閲覧できる「資料一覧」機能の他に、資料が成立年ごとに表示される「年表検索」、資料の成立地を地図上でしめす「地図検索」などによって構成されており、年表や地図から各頁へのリンクが設定される。また、階層ごとに検索をすることが可能な検索機能が実装されている。



図1：「歴史写真」の3年分を格納したDCH

本研究では、歴史写真の各頁1点1点にメタデータを付与したが、適応させたメタデータ項目は「タイトル(dc:title)」「制作(撮影)者(dc:creator)」「内容記述 dc:description)」「主題(dc:subject)」「公開年月日(dc:date)」「縦横の長さ」「頁数」「地域(dc:coverage)」「雑誌名」「号数」などである。

3. 調査概要

3-1. キーワードの設定

前項であげた主要研究テーマの6項目の1つである、「(3) 掲載された内容」の調査については、主に写真の被写体に関する調査を行う。調査については、最初に現物資料の調査を行い、題材として比較的多いと考えられた情報を中心にキーワード語を設定し、資料をDCHシステムに格納後、各頁のメタデータ内の「主題(dc:subject)」

項目に、該当するキーワードを入力した。

キーワードについては歴史写真に特化した用語を選定した。理由は雑誌「歴史写真」は日々発生する時事的な話題のみならず、歴史的、文化的な題材を数多く掲載しており、その概要を調査する上では、歴史や文化と関連する用語をきめ細かく設定が必要であると考えた。そのため、一般的な用語とともに、歴史・文化分野と関係する用語を重点的にキーワードとして選定した。そして、さらにその中で、どのキーワードに関する写真が多く掲載されているかを明らかにする。

山本甲	タイトル	
主題	主題	「建物・施設・都市景観」「(婚・葬以外の)式典・儀式・催し」
索引事項に関する注記		
内容記述	雑誌名	歴史写真
	号名称(特権号など)	御大典記念号 亀之巻
抜き取り雑誌記述	巻/編/年(Vol.)	
	号(No.)	35号
	頁/面	19頁
出版者		歴史写真会/東光園
寄与者		
技法		
言語		日本語/英語
年代範囲		大正
著作権		

図2「主題」部分を表示したメタデータ

歴史写真に対応させたキーワードは、著者が前述したDCHシステム用に構築した事物概念体系を参考としながら、主に『出来事(Event・Incident)』『人物(Person)』『各種の人工物と自然物(Substance)』の三点をカテゴリーの柱としたキーワードを選定した。これらの用語は厳密に意味の上位・下位関係を体系化したものではなく、様々な出来事、人物の属性、人工物や自然物を指し示す一般的な言葉の中でも、「歴史写真」において高い頻度で被写体となっている用語を抽出したものである。入力にあたっては全ての資料に必ずこれらの語のいずれかを入力する必要はなく、また複数のキーワードの入力も許容される。

まず、『出来事』においては、「事件」や、「戦争・戦闘・銃後の活動」、「裁判」、「事故」、「災害」、「日常生活・風俗」、「葬儀・婚儀」、「(婚・葬以外の)式典・儀式・催し」、「会議・集会・講話会」、「演劇・芸能・音楽会」、「スポーツの試合」、「(人の)往来」、「博覧会・展覧会」などのキーワードを設定した。

そして、『人物』としては比較的登場頻度の高い人物の職業を中心にキーワードを設定した。これらの具体的な内容としては「君主・貴族」、「政治家・官僚」、「軍人」の他、「実業家」、「ジャーナリスト」、「学術関係者」、「学生・子供」、「選手」、「芸能人」、「僧侶」、「犯罪関係者」、

などである。

また、これらの出来事の他に様々な事件の舞台となった場所や関連した『各種の人工物と自然物』が被写体となる場合が多い。これらを具体的にあげると、出来事の舞台となった建物の他、歴史や文化と関係する「建物・施設・都市景観」、「陵墓・記念碑・各種遺跡」などの他、「乗り物」、「武器・武具」「貨幣・紙幣・切手」、「仏像・彫像」、「美術・工芸」、「衣装・装束」「動物・自然」などをあげることができる。

これらの幅広いキーワードの中で、初期の歴史写真がどのような題材を多く掲載したかを明らかにするために、890 頁分の写真のメタデータの「主題(dc:subject)」部分に、関連するキーワードを入力した。キーワードの入力は必須事項ではなく、特に該当する項目がなければ入力不要としたが、結果的に全ての頁に何等かのキーワードが付与された。その後、検索機能などを用いて、各件数の合計を集計した。

検索結果			
TOTAL 199 Results			
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 ... 20			
資料群	資料タイトル	作成者	成立年月日
雑誌「歴史写真」	16大04年10月_博覧西大統領の軍旗授与と軍旗告別 (海外・外地)	歴史写真会/東光園	1916/03/01
雑誌「歴史写真」	15大04年10月_東京ロンドンの陸身者戦地に向ふ (海外・外地)	歴史写真会/東光園	1916/03/01
雑誌「歴史写真」	14大03年07月_白耳義 (ヘルギー) 加児の英吉利 (イギリス) 移送 (海外・外地)	歴史写真会/東光園	1916/03/01
雑誌「歴史写真」	11大04年11月10日_米軍シアトル兵團領事館及び農園組合の御大典奉祝 (海外・外地)	歴史写真会/東光園	1916/03/01
雑誌「歴史写真」	10大04年11月10日_米軍シアトル日本総領事の御大典奉祝 (海外・外地)	歴史写真会/東光園	1916/03/01
雑誌「歴史写真」	09大04年11月10日_爪哇/バタヴィアの御大典奉祝 (海外・外地)	歴史写真会/東光園	1916/03/01
雑誌「歴史写真」	08大04年11月10日_馬來半島スレム/ムの御大典奉祝 (海外・外地)	歴史写真会/東光園	1916/03/01
雑誌「歴史写真」	07大04年11月15日_台湾台北及び琉球那覇の御大典奉祝 (海外・外地)	歴史写真会/東光園	1916/03/01
雑誌「歴史写真」	31大04年04月_南風吉城内の勳章授与式 (海外・外地)	歴史写真会/東光園	1916/02/01
雑誌「歴史写真」	30大04年11月10日_京奥の御大典奉祝	歴史写真会/東光園	1916/02/01

図 3：検索結果の表出画面

最初の『出来事』の中で最も多いのは結婚式と葬儀以外の「式典・儀式・催し」である。具体的には、即位式、除幕式、開閉会式、進水式、開通式、戦勝式典、各種の祭礼などである。これらの中には田植の儀式や各地の祭りなど幅広い内容が含まれている。

その次に多くみられたのは第一世界大戦の影響もあって、「戦争・戦闘・銃後の活動」などの写真である。さらにその次に多いのは、「婚儀・葬儀」であるが、その大部分を占めるのは「葬儀」である。特にこの時期には昭憲皇太后(1849-1914)、有栖川宮威仁(1862-1913)、徳川慶喜(1837-1913)、井上馨(1836-1913)などの有力者の葬儀が続くため、葬儀の写真と記事の割合が高くなっている。

表 1：『出来事』に属する主な写真とその件数

『出来事』	件数
「(婚・葬以外の)式典・儀式・催し」	199
「戦争・戦闘・銃後の活動」	98
「葬儀、婚儀」	62
「会議・集会・講話会」	34
「博覧会・展覧会」	33
「往来」	31
「事故」	28
「災害」	25
「スポーツの試合」	12
「日常生活・風俗」	10
「事件」	6

そしてその次に多いのは、議会、政党の代議士会や市民集会などの「会議・集会・講話会」さらに「博覧会・展覧会」が続き、その後様々な人々の訪日や渡米などを伝える「往来」の順番となる。そして、現代においては最もニュースとしてとりあげられやすい「事故」や「災害」は他の項目と比較して少数であった。

表 2：『人物』に属する主な写真とその件数

『人物』	件数
「軍人」	128
「君主・貴族」	76
「政治家・官僚」	55
「(スポーツ)選手」	10
「実業家」	3
「芸能人」	3
「僧侶」	3
「学術関係者」	2
「学生・子供」	2
「犯罪関係者」	2
「ジャーナリスト」	1

次に『人物』のカテゴリーにおいては、第一次世界大戦と関係する写真に登場した「軍人」が最も多く、それ以外は儀式や葬儀、会議・集会などの写真に被写体となった「君主・貴族」「政治家」が多い。そして、それ以外は「(スポーツ)選手」などが多い。一方でこの時期は、政治家と比較して「実業家」などの「民間人」は殆ど登場することはない、概ね軍人、君主・貴族、政治家などの「公人」が主な被写体となっている。

表3：『各種の人工物と自然物』に関する写真とその件数

『各種の人工物と自然物』	件数
「建物・施設・都市景観」	181
「陵墓・記念碑・各種遺跡」	60
「動物・自然」	57
「乗り物」	51
「貨幣・紙幣・切手」	17
「美術・工芸」	16
「衣装・装束」	10
「武器・武具」	6
「仏像・彫像」	3

そして最後に、『各種の人工物と自然物』について考察すると、この中で最も多数を占めるのは「建物・施設・都市景観」であった。これらの写真は、公的な機関や寺院など巨大建造物が多く、一種のスペクタクルを形成する建築物や景観が多い。また「陵墓・記念碑・各種遺跡」も文化遺産と認識されていた施設が多く、その次の「自然・動物」も所謂「景勝地」と呼ばれる景色を題材とした写真である。一方で次の「乗り物」は当時登場し始めた、飛行機、飛行船の他、鉄道、船などを題材にした写真である。この中でも特に飛行機とその事故については複数回取り上げられている。そしてそれ以外の「貨幣・紙幣・切手」「美術・工芸」などの項目についても、歴史や文化と関係する文化遺産としての側面が強く、「歴史」や「文化」といった観点から多くの題材が選ばれている。

このように『出来事』『人物』『各種の人工物と自然物』の三点から考えると、「歴史写真」が当時の様々な出来事を掲載対象としつつも、将来においても「記念」や「遺産」として残るような事物が被写体となっていたことが分かる。

3-2. 巻頭言と編集後記の調査

また写真本体だけではなく、「歴史写真」の巻頭言や編集後記にも「(1) 発行主と発行組織の概要」、「(2) 編集体制と編集過程」「(5) 流通形態および読者層」、「(6) 印刷技術」などに関する情報が記載されている。これらに該当する情報がある場合は、メタデータの「内容記述 dc:description)」に、対応する項目番号とその内容の概略を入力した。例えば「(2) 編集体制と編集過程」については新年の挨拶などに表記される「歴史写真会従事員」の名前とその人数や、写真や投稿に関する募集案内などの情報を入力した。また「(5) 流通形態および読者層」、などについて、同誌を配布する「歴史写真会」の支局、支部、特約店などの体制や在所などについての情報や、

会員数などに関する情報を入力した。また、付録などの宣伝には、印刷技法や製版手法が宣伝文の中に含まれている場合が多い。そのためこれらの情報も、「(6) 印刷技術」として情報を記載した。そしてこれらを後から各(1)から(6)の項目名で検索を行うことで関係する情報を確認し、調査を行った。

具体的には(1)と(5)の両方の観点から、「歴史写真」を発行する「歴史写真会」運営形態や、運営規則、支払システムに関する情報を「内容記述」に注記として入力した。また大正5(1916)年までの間に中国、韓国、台湾などまで拡大した支部の名称や、会に所属することで受けられる各種の特典サービスの内容も注記として入力した。

また(2)の観点からは、巻頭言や編集後記に記述されている、「従事員」の人数(大正5年には44名)や、「歴史写真会」から離脱し類似の商売を始めた元従事員に関する注意喚起の情報など、運営上に起こったと思われる問題などについても注記として入力した。

そして(6)の観点からは、巻頭言や広告に記載されている項目として、使用されている「アート百斤紙」などの紙種類の情報や、印刷製法である「アートタイプ」や「写真銅版」などの情報を入力した。

3-3. 年表からの分析

次に年表機能を用いて、「(2) 編集体制と編集の過程」を考察する一環として、頁構成と最終撮影日から発刊までの期間の確認を行った。各資料のメタデータは一括して、「歴史写真」が発行された各月の1日の日付が入力されている。そのため年表上では、全ての頁が発行月のテーブルの中に表示される。

09大02年4月18日 大隈重信 自邸 排日問題の検討
10大02年4月19日 板垣退助像 芝公園 除幕式が美
11大02年4月19日 板垣退助像 芝公園 除幕式が美
12大02年4月23日 江戸子会 南国美術倶楽部 開催
13大02年4月24日 日比谷騒乱事件公判 東京地裁
14大02年5月02日 排日問題講話会 上野精養軒 美
15大02年5月04日 飛行家武石浩坡 飛行場 歓迎会
16大02年5月04日 飛行家武石浩坡 深草練兵場 着
17大02年5月04日 飛行家武石浩坡 深草練兵場 着
18大02年5月 飛行家武石浩坡の遺骸 大阪江戸堀
19大02年5月 飛行家武石浩坡の 葬列 大阪朝日新聞
20大02年5月04日 飛行家武石浩坡の遺骸 大阪天満
21大02年5月04日 榎本武揚の銅像 向島梅若神社
22大02年5月14日 大久保利通神道碑 青山墓地 除
23大02年6月号(広告) 近古日本歴史写真帖のHP 1
24大02年6月号(広告) 銅像及記念碑製作報告のHP

図4：大正2年6月号についての年表表出部分

一覧項目では、通し番号と、写真が撮影された月日、記事内容が入力されている。そのため、年表を閲覧することによって、各号がいつ撮影された写真をどのような順番で構成したかを確認す

ることができる表示内容になっている。そして、各月の最後に撮影された写真の撮影月日を把握できるため、最後の写真撮影からどの程度の日数を経て発行が実現しているかを把握することができる。その結果の一部は表4の次の通りである。

表4：各号に掲載された写真の直近の撮影日

号数(一部のみ)	各号の最も直近に撮影された写真の撮影日 (末尾の数字は頁数)
大正2年04月号	大02年03月03日(18)
大正2年07月号	大02年06月15日(18)
大正2年10月号	大02年09月01日(07)
大正3年01月号	大03年11月30日(17)
大正3年04月号	大03年03月15日(14)
大正3年07月号	大03年06月13日(30)
大正3年10月号	大03年08月30日(06)
大正4年01月号	大04年12月18日(07)
大正4年04月号	大04年03月09日(37)
大正4年07月号	大04年06月05日(07)
大正4年10月号	大04年09月01日(41)
大正5年01月号	大05年12月09日(16)

まず年表からわかることとしては、前々月の早い時期に撮影された写真から順番に掲載されているものの、一部については、順番が入れ替わることや、数か月前におきた出来事などが、挿入されるなど、必ずしも時系列では構成されていないことをあげることができる。特に欧米で起きた出来事については、2-3か月の間隔を置いて写真が掲載されている。

一方、表4に示される各号に掲載される最も新しい出来事の写真は発行する前の月の中旬頃に撮影されたものが多い。月によっては数ヶ月前の写真や、前月の1日前後であることもあるが、最も発行日に近い撮影例は大正4年1月号に掲載された前月12月18日に撮影された写真である。

歴史写真は毎月1日を発行日とすることを会員に告知しているため、それが事実であるとすると、最後に撮影した写真を取り込んでから概ね2週間から3週間で発行されていたことが分かる。そして翌月号は、その前月の中旬から当月の15日前後までの写真を掲載する循環であったことが推定される。これらの日数は当時の歴史写真の「(2)編集体制と編集の過程」におけるタイムスケジュールの概要を探る上で、一つ手がかりとなる。

3-4. 「地図検索」機能の活用

次に「地図検索」機能については、主に「(1)発行主と発行組織の概要」についての調査に活用した。創刊間もない時期の「歴史写真」が海外を含めてどの程度の範囲の地域の写真を掲載していたかを明らかにすることは、同誌が様々な地域から写真を調達できる能力をどの程度有しているかを推定する上で一つの手がかりになる。まず海外及び外地における写真の掲載については、メタデータの「地域」覧に「海外・外地」という情報を入力した。その頁の件数を表したのが表5である。

表5：「海外・外地」の写真の掲載件数

期間	件数	
大正2年	04~06月号	1
	07~09月号	2
	10~12月号	2
大正3年	01~03月号	9
	04~06月号	3
	07~09月号	27
	10~12月号	53
大正4年	01~03月号	43
	04~06月号	40
	07~09月号	14
	10~12月号	9
大正5年	01~03月号	41

創刊当初は概ね国内の話題に終始しているが、第一次世界大戦が勃発した大正3(1914)年以降飛躍的に増加することがわかる。また、これらの内訳は、欧州における写真も多いが、日本が攻撃の対象とした当時のドイツの治世下にあった遼東半島や南洋諸島などに関する写真が多い。またこれを契機に中国国内や南洋地域の写真の掲載が多くなる。大正4(1915)年末から大正5(1916)年の初頭にかけては、大正天皇(1879-1926)の即位の大礼を奉祝する各地の様子写真が掲載されているが、これは日本国内だけではなく、海外の様子を写した写真も掲載されている。中国やアジア地域における具体的な地域としては、台北、遼陽、北京、釜山、汕頭、琿春、遼陽、漢口、上海、京城、バタヴィヤなどである。またアメリカについてもバンクーバー、ホノルル、シアトルで撮影された写真が掲載される。これらを地図上で示しているが図5と図6である。図5は日本と中国のみの範囲であるが、図6はさらに広範囲の地域も示されている。

大正4(1915)年の11月に行われた即位式の当日に行われた奉祝の行事は、翌月の12月号や翌年の1月号を中心に掲載された。歴史写真では

これらの地域で行われた奉祝行事を撮影した写真を2月以内に誌面に掲載しており、これらの地域から写真を取得する手配が整えられたものと推定される。

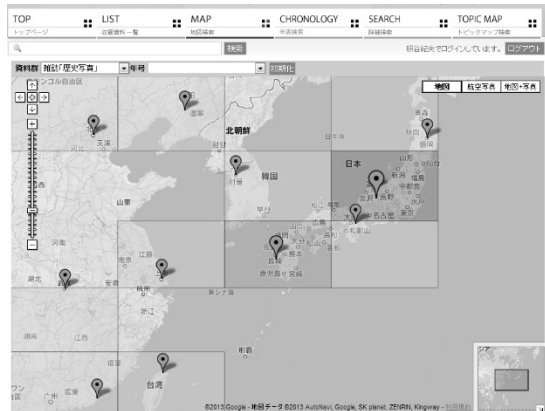


図5：奉祝に関する写真が撮影された地（東アジア周辺）

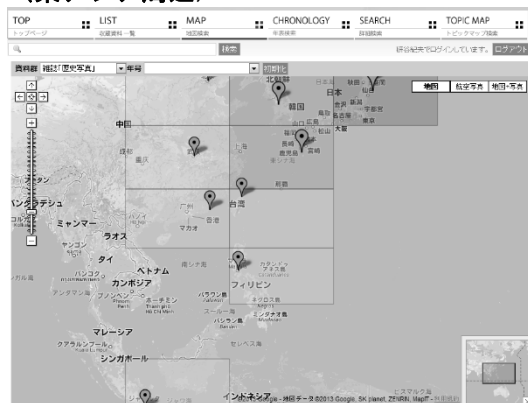


図6：奉祝に関する写真が撮影された地（東南アジア周辺）

3-5. 電子付箋の活用

最後に電子付箋機能については、特に「(4) 写真やレイアウトに関する表現」に関する調査に用いた。「歴史写真」については、概ね1頁につき写真1枚の構成であるが、大正4(1915)年頃より1枚に複数の写真を配置し、レイアウトを構成する頁があることが、原資料の調査で判った。

これまでの通説においては、一枚の誌面で複数の写真のレイアウトを考えて写真を配置するのは、大正後期のグラビア印刷機が発達して以降と考えられている。しかし、大正の早い段階から、レイアウトに関しては様々な試みが行われている可能性があるためこれらの調査を行うことにした。

レイアウトの特徴について、様々な位置に情報を付与できる電子付箋を用いて、その注記を行った。またメタデータには、レイアウトに関する電子付箋による注記があることを入力し、検索がで

きるようにした。



図7：電子付箋を活用したレイアウトの特徴に関するコメント付与

その結果、大正4(1915)年頃より、1枚の大きな写真の上に小さい写真を重ねるようなレイアウト構成が見られるが、大正5(1916)年には様々な形にデザインした写真を配置することや、複数の写真の中央に輪郭と陰影の明確なオブジェクトの写真を中央にもってくることで、中心のオブジェクトが立体的に見えるような写真構成を行っている。

このようなレイアウト構成をした頁は大正5以降特に増加し、大正5(1916)年2月号の段階では、全30ページ中21ページに及んでいることが分かった。その他については、「歴史写真」の編集などに関わった複数の重要な人物が集合写真上に存在する場合は、それらの人物が写る部分にも電子付箋を付与し、確認ができるようにした。

具体的には歴史写真会の役員や顧問などに名を連ねる阪谷芳郎(1863-1941)、黒田清輝(1866-1924)、横山健堂(1872-1943)、星野錫(1872-1943)、小川一眞、丸木利陽や関係する政治家などである。これらの中で特に「阪谷芳郎」については、大正2年4月10日大日本宗教大会、4月13日乃木神社訪問、7月30日明治天皇御一年祭遥拝式、11月05日増上寺起工式など、4件ほど写真の被写体となっていた。また同様に星野は2件、黒田、小川と丸木は1件ずつ記事の対象となっていた。特に回数が多い阪谷が「歴史写真」の発行母体となる歴史写真会の名誉総裁になるのは大正5(1916)年以降であるが、創刊当初より複数回に渡って被写体となっていることが確認された。

4. 調査の評価と課題

本研究では大正期のグラフ雑誌「歴史写真」の分析に一種のDCHシステムを用いて各種の情報についてメタデータ及び電子付箋に内容を記述

し、一定程度蓄積された段階で、検索、年表、地図、電子付箋閲覧機能などを用いて情報を分析し各内容を整理した。これらは(1)発行主と発行組織の概要、(2)編集体制と編集過程(3)掲載された内容、(4)写真やレイアウトに関する表現、(5)流通体制および読者層、(6)印刷技術、について、それぞれ手がかりとなる情報を取得した。

これらの情報から得た知見に加えて、その他の文献資料などで得た調査を総合的に踏まえた考察については、前述したように人文系の学術誌において改めて論じる予定である[5]。本稿ではこれらの考察にあたり様々な情報を格納して、活用したDCHシステムの有効性と課題についてまとめる。

まず本研究では、階層型のDCHシステムを用いたことで、雑誌の各号全体に関する情報と各頁に関する情報の両方を格納することが可能となった。また頁単位でメタデータを付与し、頁単位で検索を出すことができるため、様々な検証には有効である。

本研究では被写体に関する情報を調査するために各メタデータの「主題」においてキーワードを付与したが、これらをまとめて検索することにより各年や年代ごとの被写体の傾向などを探ることができる。

そして、巻頭言や編集後記の頁のメタデータには、これらの項目に掲載される運営や編集に関する情報を「内容記述」に入力することにより、運営などに関する様々な情報を格納することができる。また海外で撮影された写真については「地域」の項目などで、地域名や「海外・外地」といった記述をすることによって、海外で撮影された写真を一斉に呼び出すことができる。

また、「地図検索」機能についても、メタデータ上では撮影地点を明記することができるが、それらが日本本土や東京からどの程度の距離である地点であるかを視覚的に確認することで、掲載写真を調達した範囲を視覚的に確認することができる。

また「年表検索」機能を用いて、各号ごとに収録された写真内容と撮影年月日を表示させることによって各号が、いつ頃からいつ頃まで撮影された写真を掲載しているかを一覧として表出し、最後に掲載された写真が何月何日に撮影したかを、わかりやすく示すことができる。

また、電子付箋機能については、誌面レイアウトの特徴などについて、該当箇所を示す形でコメントを入れることができ、メタデータなどの中に文章で示すよりも、よりわかりやすい解説を残すことができる。前述したように、「歴史写真」が発行された時期は、一頁につき一枚という単純なレイアウトの時代から、一枚に複数の写真が構成される本格的な「グラフ雑誌」に移行する過渡期にあたる。そのため、これらの細かい変化を解説

するには、電子付箋などの機能を用いてその特徴を記述することが望ましい。

一方で、その後発刊された歴史写真やその他の類似のグラフ雑誌をデジタル化して取り扱っていく上での課題は、資料の最少単位をどのように扱うかという課題がある。「歴史写真」や類似の雑誌は1頁の中に複数の話題の写真が入ることや、見開きで1つの事物を表現する例などがみられる。そのためこれらの資料の単位をどのように設定するかという点が課題になる。

また、本調査の内容調査で用いた『出来事』『人物』『各種の人工物と自然物』は現物資料調査において、創刊期の「歴史写真」に広くみられる被写体から選択したものである。本研究においては、各写真への適応は、筆者自身によって行われたが、その適応が他者からみて適切であるかについては、より複数の目で検証していく必要がある。特にWEB上で閲覧することが可能な、DCHシステムを用いる場合は、これらを複数で検証することが可能である。そのため、他者による検証なども取り入れながら、複数の視点でキーワードの付与も行われることが望ましい。

大量の視覚資料の分析を必要とするグラフ雑誌の調査においてDCHシステムを用いることは、資料を複眼的な視点から分析する上で、様々な補助機能を提供しよう。このようなシステムを用いながら、様々な知見を集積し、それらを分析することによって、これまで研究途上であった大正前期のグラフ雑誌に関する研究の進展が期待される。

参考文献

- 1) 近年の研究として次の論考がある。
研谷紀夫:岡部長職関係書簡にみる小川一真と岡部長職の交流と人脈,行田市郷土博物館紀要, pp66-80, 行田市郷土博物館 (2013).
- 2) 代表的な例として次のような論考がある
金子隆一:印刷文化のなかの写真-その始まりから確立まで,國文學,四十四巻十号,学燈社,pp89-93,(1999).
前島志保:画報欄の時代-雑誌写真の変遷と昭和初期の『主婦の友』,比較文学研究,第90号,東大比較文学会,pp47-67(2007).
- 3) 後藤真:写真「史料」のためのデジタルアーカイブ,写真経験の社会史,pp95-115,岩田書院(2012).
- 4) 研谷紀夫:アーカイブズの構造情報とデジタルデータの仕様情報の入力重視した Digital Cultural Heritage とそのコンテンツマネージメントシステム,人文科学とコンピュータシンポジウム 2011 論文集,pp367-372,情報処理学会(2011).
- 5) 本調査を基にした論考については次の論文として発表される予定である。
研谷紀夫:月刊誌『歴史写真』と歴史のイメージ表象~大正初期の『歴史写真』の誌面内容と「歴史写真会」の運営を中心に,風俗史学,54号.